

# 蛇紋岩にふとん掛けて（一）

何これ。家のだ真中に異物だ。丁度リビングとダイニングの間に落ちていた。否、正確に表現すると鎮座していた。とある土曜日の夕刻4時頃のことであった。

（猫の）よもたんが背中を総毛立たさせ、尻尾ブンブン、シャーシャーと威嚇するも近づけず、必死で（猫にとって）強烈な所謂ネコパンチを1m程離れたところへ浴びせ続けるも、全く効果なく空を切っている。

雑用・所用を片付けて帰ってきたら、この様な状況だ。よもたんも必死にネコパンチを繰り出し続けているも、合間合間にチラッとこちらに流し目、どうやら自分で対処しようがなく、こちらに助けを求めているつものようだ。

でもね。助けを求められても、よもたんにも全く危害が及んでいる状況ではなく、よもたん一人（猫）が大げさにこの異物と対峙していると、客観的な見方もできるその程度の危機的状況と冷静に判断した。が、よもたんの気持ちも十分に汲むこともできる異様さではある。珍しいことに、よもたん脛にスリスリしている。

一体これは何か。動かないので間近に見ると、どうやら石のようである。見方を変えれば岩とも映るが、大きさ形状を近似的に表現すると、大きな成猫が香箱組んで目を瞑り、今晚のご飯を妄想しているかの様なフォルムと表現するのが的確となる。

まさかよもたんが他の猫と間違えてこれに威嚇していたのか。石と本物の猫と間違えるなんて「バカな猫だねえ」と口走る。瞬間「飼い主に似る」の格言が脳裏をよぎり反省。

この物体が何処から落ちてきたのか、転がり込んできたのか。すわ隕石か、と先ず天井を見るも異常なし。では、水平方向からかと360度見渡すが、いつもと比較しての異常な状態や変化は全く見当たらない。もしや泥棒か。通帳を確認。ある。はんこを確認。ある。再度、通帳の内容を確認したが直近の記帳の状況と変化はなかった。（もしかして増えたりしての期待）最後に嫁さんのへそくりがあるであろうあのあたりを重点的にチェックしたが異常の微塵も見つからなかった。

泥棒が「カネ・モノ」を盗まず「モノ」を置いていった。昔、泥棒がゲン担ぎで仕事が終わった最期にその家の真中に「悪運」を落としてその家を去るという話があったことを思い出した。でも何も盗まれずに「モノ」だけ置いていくことは考えにくいし、そもそも泥棒に入られた形跡や痕跡もない。「モノ」も「悪運」でなく、岩である。

まさかと臭ってみたが、無臭。紛れもなく岩である。よく見るとその岩に台座が敷かれていた。どうやら、ここに鎮座している「モノ」は観賞用の石または岩に間違いのない様である。それにしても、何故。何故。何故。何故。何故。不思議。誰が。